

## 参加型体験活動とエコミュージアム

—志和堀手作りミュージアムを例として—

山崎博史・林浩三\*・浅野敏久\*\*

(2001年12月18日受理)

### Participant Hands-on Activities and Ecomuseum: A Case of Shiwahori Collaborative Museum

Hirofumi YAMASAKI, Koso HAYASHI, and Toshihisa ASANO

**Abstract.** In June, 2001, the Shiwahori Collaborative Museum was carried out by the collaboration of Kobo Hayashi, an environmental education office, and Hiroshima Ecomuseum Research Group. The museum is regarded as a satellite of ecomuseum in Higashi-Hiroshima city. Several hands-on activities and a workshop were put into practice in the museum. Making the hand-made exhibitions of the aquatic animals in the people's neighboring freshwater was planned and eleven people of three families and fourteen graduate students tried to observe the aquatic environments of Han-gawa, a stream near the museum, and to catch the aquatic animals alive. The participants in the hands-on activities, especially most of the graduate students, were surprised at the animals being rich in variety. Experiences in the hands-on activities in the museum are necessary for the learning activities in environmental education of awareness level. Process of the hands-on activities is considered to be the same process of learning activities in the "Period for Integrated Study" at school.

#### はじめに

「地域をまるごと博物館とみなす」という意味をもつエコミュージアムという言葉は、まだあまり聞き慣れないものかもしれない。しかし、この言葉は、地域の良さを見直す活動やまちづくりの現場では、最近次第に浸透しつつある。1995年には日本エコミュージアム研究会が設立され、また2000年春には、エコミュージアムに関心を持つ広島近在の有志により広島エコミュージアム研究会(以下EM研)が発足した。EM研は環境教育事務所 工房はやし(代表 林 浩三)と共に広島県東広島市志和堀にある、茅葺き屋根の民家(「ホタルの宿」と呼称される)を活動拠点として、地域に根ざした環境教育等の企画や実践等を行っている(浅野, 2000)。EM研の代表は著者のひとり浅野が務め、同じく林および山崎も会員として活動に参画している。

一方、小学校・中学校において平成14年度から実施される学習指導要領では、総合的な学習の時間

が新たに導入される。ここ数年の間に試行された総合的な学習の時間の学習活動においては、学習テーマの柱の一つとして「環境」が取り上げられる事も多く、また地域の人々との関わりは不可欠である。

本報告では、環境教育事務所 工房はやしとEM研が平成13年6月、3週間に渡って実施した「志和堀手作りミュージアム」について報告する。特にその初日、広島大学教育学研究科の授業として大学院生が参加した体験活動の様子を中心に、手作りミュージアムの概要を述べる。また体験学習をキーワードとして、総合的な学習とエコミュージアムとを関連づけて考察する。

#### エコミュージアムとしての志和堀手作りミュージアム

##### 1. エコミュージアムとは

エコミュージアムとは、地域の文化や自然を保護し、住民やその居住地域について理論的、実践的に調査し、地域の将来の問題をより深く理解す

\*環境教育事務所 工房はやし, \*\*広島大学総合科学部

ることを住民に奨励するような、保存の場、研究所、学校という三つの機能を持ち、地域独自の文化を再確認し発展させることを目的とした博物館である(倉田(監修), 1996)。それを概念的に表すと、「地域内遺産の現地保存」、「住民の主体的参加」および「博物館としての活動」という3つの要素がバランス良く整い、かつ一体的に密接なネットワークを組んでいることが理想的な姿とされている(大原, 1999, 図1)。

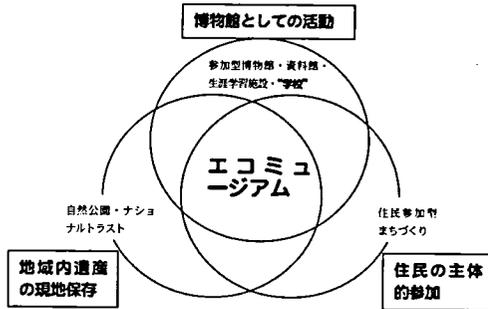


図1 エコミュージアム概念図(大原, 1999を簡略化し, 加筆)

エコミュージアムは、形態的にみると、ある地域(テリトリー)をひとつの博物館とみなし、展示室(サテライト)である周辺施設が地域内に点在し、それらが周遊路(トレイル)によって結ばれ、さらに各サテライトをつなぐ情報センター(コア)によって構成される。サテライトとは地域の自然、文化および産業遺産であり、それが存在する場だけでなくそれに関わる住民をも含む。コアとは、各サテライトの情報を統括し発信する場あるいはその機能そのものを意味する。

今回報告する活動を行った東広島市には、酒蔵やため池、歴史的町並み、伝統芸能などのサテライト候補が多数あり、さらにそれらの価値に気づいている市民も少なくない。これらの特徴により、本地域のエコミュージアムとしての展開が期待されている(浅野, 2000)。

## 2. 志和堀手作りミュージアム

### (1) 目的と活動内容

志和堀手作りミュージアム(企画:環境教育事務所 工房はやし, 協力:EM研)は、「ホタルの宿」(図2)において、ホタル観察に最適なシーズンに地域の特性を生かした行事や展示を、地域住民、学生および行政の協力により期間限定で開

催するという企画である(<http://ha2.seikyoku.ne.jp/home/koso/>)。これは、東広島市をエコミュージアムとみなしたとき、エコをキーワードとした「まちづくり」への効果が期待されるひとつのサテライトと位置づけられる。また、環境教育に対する関心が近年しだいに高まりつつある中、未だ充分とはいえない、市民が実際に現場を体験・見学できる場所あるいはインタープリテーションの実践の機会を提供することを目的としている。さらに手作りミュージアムをつくるプロセスも含めて、そこでの実践を通して、地域に根ざした環境教育のあり方を探求しようというものである。



図2 東広島市志和堀にある「ホタルの宿」

今年度の活動内容は表1の通りであり、「ホタルの宿」の土間ほかを展示スペースとして、近くの川に棲む水生生物や水質調査結果、東広島市内の生物や滝の写真等が展示された。

表1 志和堀手作りミュージアム2001年度実施計画

【開館期間】	2001年6月3日(日)～24日(日)
【開館時間】	平日 : 午後6:30～午後10:00 土曜日・日曜日: 午前10:00～午後10:00 なお、平日は展示のみで、週末はイベントを企画。
【休館日】	水曜日、木曜日
【入館料】	無料(カンパを募集)
【週末企画イベント】	6月3日(日): ふるさとの水辺探検 川でさかなとあそぼう 参加者と一緒に展示用の魚を採集し、展示水槽に入れて、生き物展示を作る。 6月9日(土): 志和堀ホタルまつり(志和堀地区の主催行事)に協賛する。 6月16日(土), 17日(日): ホタルの宿自然学校 ホタル観察と五右衛門風呂体験!(子供対象) (生涯学習講座行事: 東広島市教育委員会生涯学習課) 6月24日(日): 公開ワークショップと反省会

### (2) 参加型体験活動

志和堀手作りミュージアムで実施された参加型体験活動「ふるさとの水辺探検 川でさかなとあそぼう」は、前半の水辺の自然観察と後半のホタル観察という2つの活動で構成される(表2)。

この活動には広島市と東広島市からの一般参加の3家族11名に加えて、「体験活動を体験する」という目的で、自然システム内容学特講(地学)I(担当：山崎)の受講生14名が参加した。なお受講生には活動終了後、自由記述式の感想の提出を求めた。

前半の水辺の自然観察は、ホテルの宿の横を流れる半川で、志和堀公民館長の宗岡洋二郎氏と筆

者のひとり、林を講師として行われ、広島エコミュージアム研究会関係者が活動をサポートした。後半のホテル観察では、参加者各自が半川沿いを散策しながらホテルを観察すると共にこの時期ホテル観察にやってくる人たちへ休憩所の提供などのサービスをしている、地元ボランティアと交流する機会を得た。

水辺の自然観察は、手作りミュージアム開館初日に、参加者自らが水生生物の採集を行い、それを展示物としようという試みで、生き物の採集(採る)、図鑑での同定(調べる)、ラベルづくり(展示する)という順序で進められた。具体的な活動の概略は次のとおりである。なお、ミュージアム開館期間の半ば以降、この活動の様子が「手作りミュージアム体験の1日」という展示物としても紹介された(図3)。

表2 志和堀手作りミュージアム週末企画イベント(ふるさとの水辺探検・川でさかなとあそぼう)日程表

14:00	集合、受付
14:30	水辺の自然観察、さかなとり
15:30	展示作業、名前調べ、ラベル作り
16:30	夕食準備、五右衛門風呂体験など、夕食
19:30	ホテル観察
20:30	談話会、五右衛門風呂体験など
21:00	解散



図3 志和堀手作りミュージアム参加型体験活動の1日(2001年6月3日)

## 【採る】

参加者は、はじめに講師から活動の概要説明・諸注意を受けた後、各自が準備した網や水槽・バケツを持って半川に向かった。半川は、川幅の広いところでも4 m未満で、細礫や砂質堆積物からなり、植生に被われた州が河床の大部分を占める小河川である。

川に着くと、講師に網の使い方や魚がいそうな場所を教えてもらった後、各自が魚採りを始めた。その際、川に入ったのは子ども達と学生であり、保護者は土手の上でその様子を見たり、子ども達に指示を与えていた。

子ども達の魚採りは、はじめは失敗の連続であったが、学生のサポートも受けて、徐々に成果があがるようになっていった。網で魚を追うのではなく魚を網の中に追い込むようにすること、魚は水際の草の下あたりにいるらしいことなど、魚採りのコツがわかってきた様子も見受けられた。

## 【調べる】

採集した生き物を「ホタルの宿」に持ち帰り、水槽やタライに移して観察した。小川での約1時間の採取時間であったが、多種類の生き物を採取できたことに、子どもも学生を含めた大人も驚いていた。

集めた生き物を見て、年少の子ども達では、つついたり、触ったり、掴んだりする様子が観察された。一方、年長（小学生低学年）の子どもの中には、保護者や学生と共に、形や色などの生き物の特徴を図鑑と比べる者もみられた。また学生の中には、実際のサンプルと図鑑との微妙な違いや同じように見えても異なる種が多数あることに気づき、同定作業の難しさを再認識した者もいた。

作業の結果、15種類以上の動物がいることを確認した（表3）。

表3 志和堀手作りミュージアム参加型体験活動で採取された生き物リスト

ナマズ、ギギ、カワムツ、アブラハヤ、ヨシノボリ、ドンコ、ムギツク、クサガメ、トノサマガエル、ヌマガエル、ウシガエル（幼生）、サワガニ、カブトエビ、エビ（ヌカエビ?）、ヤゴ数種
---

## 【展示する】

採集してきた生き物はいくつかの水槽に分けて展示された。その際、水槽の外側に表示するラベルも参加者が手作りした。ラベルは、講師のアドバイスにより、紙を生き物の形に合わせて作られた。これにより、水槽の中にいる生き物とラベルの名前との対応が容易なることを体験した。

## 体験学習と環境教育

吉川（2001）は、体験的な学習活動の重要性について、平成14年度から小学校・中学校で実施される学習指導要領に基づいて、次のように要約している。すなわち、一般方針の中では体験的な学習を通しての道徳性の育成であり、また総合的な学習や各教科に関しては、学習活動の在り方としての意義である。学習活動の在り方としての意義とは、体験的な学習が、1）学習の対象や方法への関心・意欲・態度を高めること、2）場面に応じて自ら考え判断する力を育成すること、3）学ぶことの意味を理解し、実感を伴いながら知識・理解を身につけること、に関して重要な役割をはたすというものである。

このように社会体験あるいは自然体験の意義が新学習指導要領で強調されるということは、逆に言えば、現在の児童・生徒にはそのような体験活動の経験に乏しいことを示唆しているとみることもできよう。またこうした状況は、児童・生徒の中だけでなく、今の大学生の自然への直接体験の少なさの指摘（鳥越ほか、2001）にもあるように、若年層を中心に幅広い年齢層に渡っているものと考えられる。たとえば、今回の体験活動に参加した理科教師を志望する大学院生でさえ「…初めてあんなにたくさんのホタルを見ることができ、ホタルってこんなにきれいで不思議な生き物なのだ、と感動しました。…」や「…自分の知らなかった生き物（カワムツやドンコ、ヨシノボリなど）を知ることができたことである。しかも、そのような生物が『自分の身近な場所』にいることを知れたことがなにより印象に残った。…」、あるいは「『釣りは科学だ』と〇〇先生が述べられた事があります。今回の活動で私も『科学』を味わおうと思いました。しかし実際は、知恵を使ってどうこうというレベルではなく、自然に息吹く多くの生命に興奮して、それどころではありませんで

した。とても楽しい体験をしました。いつか、自然環境について考えることが出来るようになるには、自分の周りの環境と照らし合わせる事の出来る、豊かな自然体験が必要だと思います。」という感想を述べているということは、そのことを物語っていると言えるであろう。

一方、環境あるいは環境問題に関して、学校教育や生涯学習、あるいは民間組織等による地域社会レベルでの学習活動や各種マスメディアによる情報提供により、一般の人々の間で大きな関心が寄せられるようになってきているという現状もある(小川, 2000)。今回取り上げた、志和堀手作りミュージアム活動は、民間組織等による地域社会レベルでの学習活動に含められるものであり、地域に根ざした環境教育活動の展開例と位置づけられる。

このような環境教育活動は次の3つに類型化して考えることができる(小川, 2000)。

- ・問題意識を持たせる教育活動
- ・知識の獲得をめざす教育活動
- ・意志決定・行動ができることをめざす教育活動

また、環境の見方つまり環境認識をめぐっては、2つの視点があることが指摘されている(嘉田, 1992)。すなわち、対象である自然と文化(総体としての環境)のもつ特質をできる限り数量化し、平均値で表し、因果関係を追究しようとする立場と対象に対して自分がどう感じるかという五感での把握を通してそれをわかつてするアプローチがあるという指摘である。前者はクロウトサイエンスつまり科学知の世界、後者はシロウトサイエンス、生活知の世界と呼ばれた。さらに環境問題への対処の方法として、前者の立場は近代技術主義および自然環境主義と、後者は生活環境主義と呼ばれている(嘉田, 1995)。

前にも述べたように、現在、若年層を中心に体験活動の不足が指摘されるが、そのことは、環境教育を行う上でも大きな支障を来すことが予想される。なぜなら吉川(2001)の指摘にもあるように、社会体験や自然体験といった直接体験は学習と生活を結びつけるという点で、非常に重要な役割をはたすと考えられるからである。つまり、学習内容やその方法を自分の生活場面と結びつけて考えることで、内容の理解が深まると共に自分を取り巻く総体としての環境への問題意識も生まれるものとする。したがって、体験活動の不足は

環境教育活動の中で最も基本的なレベルと考えられる「問題意識を持たせる教育活動」に深く影響すると言える。また地域に根ざした環境教育活動を展開するに当たっては、まず基本となる「問題意識を持たせる教育活動」を主な目的に据えて、環境を地域社会や生活の一部として捉える生活環境主義的視点が欠かせないであろう。

### 総合的な学習とエコミュージアム

学習指導要領にも示されているように、総合的学習において体験学習は重要な位置を占める。とくに、地域の自然や文化の総体としての環境をテーマとするとき、学習の様々な段階において地域の人々との連携・関わりは不可欠である。

平成14年度からの総合的な学習の時間の完全実施に向けて、多種・多様な総合的学習プログラムが開発・提案されている。地域の人々との連携・関わりに関してみると、これらの多くは、地域の人材活用という形で連携されている。これは、情報の流れからみると、地域から学校へという一方向的な連携と考えられる。

一方、地域の里地・里山を歩き、触れ、食べ、遊び、語り合いながら生活文化を学び、伝えていくことを目的とした体験学習を、地域の人々と協働しながら試行する例もみられる(竹田, 2001)。このような活動により、地域の資源がただ単にあるというだけでなく、その価値を地域住民が再発見し、自分たちの地域により詳しくなることができる、と指摘されている。これは、地域の人々との協働による体験学習を総合学習の学習活動として位置づけた時、次のような意義があることを示唆している。すなわち、異年齢集団による学習効果と地域の価値の再発見や人と人とのつながりが形成されることである。その結果、学習内容の継続的な実施による資料の蓄積や児童・生徒(学校)から発信された地域情報が地域住民の中で受け止められ易くなることが予想され、学校と地域との双方向の情報交換の可能性も期待される。

今回実施された志和堀手作りミュージアムは、半川のホタルという地域の資源を主要な展示物としながら、全国各地のホタルまつりと地域住民との関わりについての情報や半川での体験活動を通して採取した生き物および水質や周辺地域の自然環境についての写真パネル等が展示された。この

中で半川での体験活動について、参加した学生は次のような感想を述べている。すなわちこの活動を学習としてみたとき「…方向性を持たないと主催者側の自己満足になってしまうことです。また、今回の蛍の宿では自然に触れるというテーマはわかりませんが、今後、どのように展開していくのかが見えてきません。厳しい言い方をすると子供たちにしても『ああ楽しかった』で終わってしまう可能性が高いのではないかと思います。」という指摘や地域の人との関わり方について「…最近ではある種の魚が減少しているがその原因は何なのかなどといった地域ならではのこともっと伝えることができるのではないだろうか。これは一例に過ぎないが、このようなことが地域の方がもっと参加することで充実するのではないだろうか。」あるいは「…参加者の対象が限られていないということは、異年齢の人とのコミュニケーション(地域の人も含めて)を図ることができるという点で良いことであるように思われます。」という指摘である。これらは、民間組織等による地域社会レベルでの学習活動を展開する上でも考慮されるべき課題をであろう。

このように活動の発展に向けての課題はあるものの、今回の「ふるさとの水辺探検 川でさかなとあそぼう」という体験活動は、参加者自身が身近な小川にも多様な生物相が存在することを実感し、それを展示という形で発信するというプロセスで構成されており、それはまた、総合的な学習の過程と捉えることが可能である。このように考えると、学校は、校区をテリトリーとみなすエコミュージアムを考えると、概念的には「博物館としての活動」をになう場とみなすことができよう(図1)。言い換えれば、学校は、総合的な学習の学習過程やその結果等により見いだされたり再認識された地域の資源、すなわちサテライトを統括するコアとみなすことが可能となろう。

## 謝 辞

6月3日に実施された体験活動では、宗岡洋二郎氏をはじめ志和堀地区の人たちおよび広島エコミュージアム研究会関係者には、多大な御協力をいただいた。また手作りミュージアムの実施に当たり、広島エコミュージアム研究会は学園都市づくり交流会議(東広島市)から助成を受けた。以上に方々、機関に記して感謝申し上げる。

## 文 献

- 浅野敏久, 2000, エコミュージアムとまちづくり。東広島市自然研究会報「東広島市の自然」, no. 27, pp.15-17.
- 嘉田由紀子, 1992, なぜ、いま参加型調査なの? 琵琶湖研究所(編) シロウトサイエンスのサイエンス, pp.5-8.
- 嘉田由紀子, 1995, 生活世界の環境学。農山漁村文化協会, 320p.
- 倉田公裕(監修), 1996, 博物館学事典。東京堂出版, 491p.
- 小川正賢, 2000, 茨城県における環境教育と茨城大学のかかわり。茨城の水環境編集委員会(茨城大学)(編) 茨城の水環境, pp.101-107.
- 大原一興, 1999, エコミュージアムへの旅。鹿島出版会, 183p.
- 竹田純一, 2001, 地元学から総合学習へ ほくらは里地探検隊(里山の知恵と技に学ぶ山形県最上町・満沢小学校)。地域から変わる日本地元学とは何か, 現代農業増刊, 農山漁村文化協会, pp.110-117.
- 鳥越兼治・大谷修司・舟木賢治, 2001, 自然観察プログラムについての一考察。学校教育実践学研究, 7, pp.57-64.
- 吉川成夫, 2001, 体験的な学習の役割。初等教育資料, no.743, pp.2-5.